

## 「最幸のまち かわさき」の実現に向けて

### 1. はじめに

17世紀に東海道の宿場町の1つだった川崎は、京浜工業地帯の一躍を担い日本の高度経済成長を牽引する工業都市として発展してきました。現在では、グローバルな事業展開を行う先端科学技術を持つ企業や研究開発機関が立地し、学術・開発研究機関の従業者構成比は、日本の大都市の中で第1位、また、公害を克服した先進的な環境技術を活かした国際社会への貢献など、先端産業・研究開発都市へと変貌を遂げつつあります。また、本市は川崎の歴史・文化に深く関わる多摩川や首都圏を代表する自然環境を有する生田緑地等の豊かな自然のほか、音楽や文化・スポーツに彩られ、利便性も高く、全国や世界に誇れる魅力と活力に溢れる、様々な可能性をもつ元気いっぱいの街になっています。

日本の総人口が減少局面にあるなか、本市の人口は、平成に入って以降、約37万人増え、150万人を突破し、現在も増え続けており、特に若い世代に「選ばれる都市」として成長を続けています。

一方で、時代の急速な変化に加え、確実に訪れる人口減少、厳しい財政状況など、市政の舵取りが難しい時期が続くことから、社会経済環境の変化への対応に向け計画的な行財政運営に取り組み、また、多様な主体と協働・連携し、飛躍に向けたチャンスを活かしながら直面している様々な課題に果敢に挑戦しています。

こうした中、本市は、昨年3月に総合計画第2

期実施計画を策定しており、2つの基本目標「安心のふるさとづくり」と「力強い産業都市づくり」のもとに、めざす都市像「成長と成熟の調和による持続可能な最幸のまち かわさき」の実現に向けて取り組んでいます。

### 2. めざす都市像と交通体系

本市では、首都圏における立地を活かしてまちの魅力・活力の向上を図る「広域拠点」、産業振興の核となり経済を牽引する「臨空・臨海都市拠点」、市民生活の中心となる「地域生活拠点」の整備を進めるとともに、広域的な交通網や身近な交通環境の整備を進めるなど、広域調和・地域連携型の都市構造を目指しています。

広域拠点の主な取組としては、川崎駅周辺では、駅前広場の再編や新たな北口自由通路・改札口の新設、武蔵小杉駅周辺では、民間活力を活かした都市機能の集積やJR横須賀線の新駅整備などを進めてきました。一方、急速な人口増による鉄道の混雑など、拠点整備の進展に伴う新たな課題への対応にも努めています。引き続き、広域拠点にふさわしい都市機能の誘導や都市基盤の整備とともに、公共空間の有効活用等により、まちの賑わいや魅力の向上による活力の創出に取り組んでいきます。

地域生活拠点の主な取組としては、鷺沼駅周辺において、民間再開発の機会を捉え、公共機能の導入や交通広場の拡充など、駅を中心に多様なライフスタイルに対応した都市機能の集積や交通結

川崎市長 福田 紀彦



節機能の強化に取り組んでいきます。

今後も引き続き、「選択と集中」による拠点整備と、地域特性に応じた身近なまちづくりを進めていきます。

また、交通機能の強化に向けましては、横浜市高速鉄道3号線の延伸（あざみ野～新百合ヶ丘）や、連続立体交差事業の推進、日常生活や経済活動を支え災害時の緊急活動道路としても重要な幹線道路の整備などを進め、持続可能なまちの土台を構築していきます。

### 3. 持続的発展への挑戦

統計データなどからは、悲観的な未来が語られがちで、現状の継続だけでは、環境変化に対応できず、様々な将来リスクを避けることはできないと感じています。そのため、負のシナリオを回避する希望のシナリオを描き、その実現に向けて何ができるかを多様な主体と議論・共有して取り組むバックキャストिंगが必要と考えています。

本市では昨年、「力強い産業都市づくり」の中心的な役割を担ってきた川崎臨海部が、今後も持続的に発展し続けるための30年後を見据えた「臨海部ビジョン」を市民や企業等の様々な関係者とともにバックキャストिंगで策定しました。

「臨海部ビジョン」では、30年後の将来像として、新たな時代に求められる「豊かさを実現する産業が躍動」し、川崎臨海部の風土を活かした「多様な人材や文化が共鳴」する地域を掲げ、9つの基本戦略と13のリーディングプロジェクトを立ち

上げ、臨海部に関わる全ての人と共有し、実現に向けて協力し合い、それぞれの役割のもとに全力で取り組んでいくところです。また、川崎臨海部の持続的発展に向けて、国家戦略特区における本市の中心的な役割を担うライフサイエンス分野等を中心とした世界的なオープンイノベーション拠点である殿町地区（キングスカイフロント）の取組や、その殿町地区と対岸の羽田空港を結ぶ羽田連絡道路の整備、さらには殿町地区と羽田空港周辺との連携強化による一体的な成長戦略拠点の形成なども、引き続き着実に推進していきます。

また、近年、市民の暮らしを取り巻く環境が大きく変化し、まちづくりへの関わり方も変わり、様々な主体による市民行動が増えています。本市では多様な主体による地域づくりの「新たなしくみ」の構築にも取り組んでおり、ハード・ソフト両面からまちづくりを推進し、持続的な発展に向けて挑戦していきます。

### 4. おわりに

「平成」が幕を閉じ、この5月から「令和」という新しい時代が幕を開けました。川崎市は大正13年の市制施行以来、幾多の危機や困難を経験してきましたが、その一つひとつをチャンスに変え、成長につなげることで乗り越えてきました。今まさに、直面している様々な課題に対しても、決してあきらめることなく、自由な発想と柔軟な工夫でチャレンジを続けていきます。